

幼児における象徴の共通化の発達に関する研究

A Developmental Study of Adjustment Process with Symbols in Paired Children

村野井 均
Hitoshi Muranoi

(弘前学院大学一般教育部)

前田 明
Akira Maeda

(大分大学教育学部)

都筑 学
Manabu Tuzuki

(中央大学文学部)

序

子どもの遊びを観察しているとよく見かけることであるが、低年齢の子どもたちは、ままごとで一軒の家に母が大勢いたり、台所が何ヶ所もあったりすることがある。あるいは、同じ積木が一人にとっては『自動車』であるが、他の一人にとっては、『家』であったりするなど、めいめいが象徴を作って、集団で一致させようとはしない。これが年長になっていくにつれて、「象徴を一致させよう」とでも言うべき指向が生まれ、そのために衝突を起こしたりするようになる。例えば、誰がお母さんをやるのか、この器に入っている砂は『ケーキ』にするのか『ごはん』にみだてるのかなどである。やがて象徴が集団内で一致させられ、虚構上の役割の分担と役割意識の明確な集団遊びが成立するようになると考えられる(久保田, 1973; 加用, 1981; 高橋, 1984; 鷗田, 1985; 内田, 1986)。

従来の研究では、子どもにおける象徴の発達と年齢的特徴について明らかにしてきた(Piaget, 1962; Overton & Jackson, 1973; Jackson, 1974; Golomb, 1977; Jackowitz & Watson, 1980)。事物の性質とみたてやすさ、みたてにくさの関係について検討したものもある(Котетичвили, 1966; 高橋ら, 1972, 1974, 1976; Непомнящая, 1975; 辻野, 1978; 石橋ら, 1979; 中峰, 1979)。しかし、これらは個人を対象にした研究であり、象徴の形成が人間関係、集団関係を通してなされるという観点に欠けていると思われる。一方、Wernerら(1963)やVygotsky(1971), E'likonin(1964, 1966)らは、この観点を持っているが、役割遊びにおいて子ども一人一人関係の問題の重要性について言及していな

い。

したがって、自発的象徴使用が遊びの中で多く現られるとするならば、象徴の発達のな特徴を明らかにするためには、象徴の形成と利用を子ども同士の集団的相互作用と関連づけて検討することが必要であると考えられる。

Muranoi(1987)の探索的研究では、2歳児から5歳児、90名を2人1組にして、遊戯的場面において、実験材料に象徴的命名をさせ、また、2人の間で命名を一致させることを求めた。その結果、年齢の増加とともに命名を変えようとする傾向があること、および命名に対するコメントが増える傾向を示した。しかし、この結果は、年長児の持っている象徴的命名の調整能力を示しているのか、それとも、単に自分のつけた命名を保持する理由がないため変更しているのか明確にできなかった。

村野井(1987)は、同じく2歳児から5歳児名を2人1組にして実験を行なっている。被験児は2群に分けられ、第1日目には群ごとに特定の代理物を使用することをお店やさんごっこの場面で訓練した。第2日目には、異なった代理物で訓練した子ども同士を組合せ、被験児が売り手、あるいは買い手になるなかで代理物の選択および一致の過程を見ようとした。その結果、一致に有効な手段の発達を示すことができた。しかし、一致の過程は速く、「こっち」という一言で決ったり、手によって代理物を取ってしまうことで決定された。そのため、対立の解決に長いプロセスが必要で、かつ、解決の転換点が客観的に観察できる条件を作る必要が指摘されていた。

したがって、今回の実験では、能記の対立がお互いによくわり、手によって直接解決することができず、代理物の選択を2人同時に行なわなければならないような実

験場面を設定する必要があるといえる。

目的

ごっこ遊びが成立する背景には、幼児が互いに持っている象徴を共通化させる能力が必要と考えられる。村野井(1987 a, b)の研究では、象徴の共通化はすばやく生じることが明らかにされてきた。したがって、今回の実験では象徴を対立させる場面は先行研究と同様に設定するが、対立の解決の前に長い時間を置き、かつ、解決の転換点が客観的に観察できる条件を作り、幼児が象徴を共通化するプロセスを探る。

方法

被験者

東京都文京区立保育園園児60名(年長児18名, 年中児20名, 年少児22名)。これらは後に述べる条件にしたがって表1の下位群に配分された。

実験場面および実験材料

被験児は同年齢の者を2人1組にして実験者が実験場面に連れてきた。各組ごとに図1の場面のもとで、課題をあたえた。被験児は、装置の両側に立ち、箱から自動車にみたてた積木を選択して車庫に置き、次に店のスクリーンが開いたのち、積木を押しして店にゆき、チョコレートにみたてた積木を選択することを求められた。

村野井(1987)の実験より改善された点は次の通りで

表1 被験者の構成

	一致群	不一致群	計(人)
年長児	8	10	18
年中児	8	12	20
年少児	10	12	22
計	26	34	60

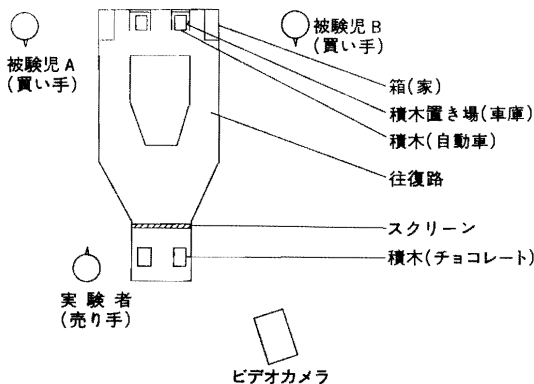


図1 実験場面と装置

ある。

1. 被験児の虚構上の役割を買手に限定した。
2. 代理物の選択は実験者が2人の被験者に積木の入った箱を同時に呈示することにより、他児の干渉を受けないようにした。同様に、店でチョコレートを選ぶ時も、実験者から一人一人が買う形をとって、被験児同士が積木を押しつけたり、手でとったりできないようにした。これにより代理物の調整がこの2ヶ所に限定され、観察できることになった。
3. 家から店まで、2本の往復路を作り、相手の選択した代理物がよく見えて、視線および言語による相互交渉が生じやすく、かつ、手で触れられないようにした、実験材料

練習試行では、現実の自動車に類似しているプラスチック製のオモチャが使われた。チョコレートには市販の実物が使われた。実験試行では、自動車やチョコレートの代理物として、ピンク色の三角柱(底面12×3.5cm; 高さ4cm)あるいは青色の直方体(1.7×4×12cm)の積木が用いられた。また、まどわし用の積木として朱色の円柱(直径3.2×12cm)が使われた。お金の代理物にはボールペンチップが使われた。

課題と手続き

[第1日目]

ごっこの場面設定: 「これから買い物ごっこをしましょう。車にのってチョコレートを買いにいきましょう」という教示を与え、装置や材料について説明したのち、練習試行および実験試行を行なわせた。

課題: 課題はいつでもつぎの通りである。

- ① 自動車にみたてた積木を選択して車庫に置く。
- ② スクリーンが除かれたら、車庫から自動車を出発させる。
- ③ 店で実験者からチョコレートにみたてた積木を買い、お金を払う。
- ④ 自動車を押しして車庫に戻り、チョコレートを食べるふりをする。
- ⑤ 食べた後、チョコレートと自動車を箱にもどす。

練習試行

まず、モデル(実験者)が自動車のオモチャによって課題を行なって見せたのち、誤りなくできるまで被験児に一人ずつ練習させた。つぎにオモチャを取り除き、積木を呈示し、「これを自動車にしてあそびましょう」と教示して、同じ課題を1試行練習させた。

全年齢において、半分組には直方体の積木を自動車、三角柱の積木をチョコレートとして与えた。残り半分組には、三角柱を自動車、直方体をチョコレートとして与えた。被験児に手順上の誤りがある時は、そのつ

表2 おてつきをした被験児の数

		第 1 日 目						第 2 日 目							
		第1試行		第2試行		第3試行		1回以上おてつきをした者	第1試行		第2試行		第3試行		1回以上おてつきをした者
		度数	割合	度数	割合	度数	割合		度数	割合	度数	割合	度数	割合	
一致群	年少児	1	10%	1	10%	3	30%	3/10人	0	0%	1	10%	1	10%	1/10人
	年中児	0	0	0	0	0	0	0/8	0	0	0	0	0	0	0/8
	年長児	1	13	0	0	0	0	1/8	0	0	0	0	0	0	0/8
不一致群	年少児	5	42	1	8	1	8	6/12	3	25	5	42	4	33	7/12
	年中児	0	0	0	0	0	0	0/12	3	25	3	25	3	25	5/12
	年長児	0	0	0	0	0	0	0/10	3	30	2	20	1	10	4/10

ど指摘し、修正した。

実験試行（第1日目）

まず、自動車の代理物と、チョコレート代理物の記憶を確認した。つぎに、代理物の選択時間をあわせるために、「これから、自動車の入った箱を『ハイ』と言って前に出しますから、自動車を選んで車庫に置いてください」と教示した。箱にはピンク色の三角柱、青色の直方体および朱色の円柱（まどわし用）の3個の積木が入れられていた。箱は一人に一箱用意され、実験者が被験児に同時に呈示した。課題は3試行行なった。

〔第2日目〕

実験試行（第2日目）

実験試行（第1日目）と同様の課題を3試行行なった。第2日目も被験者は2人1組にして課題を遂行させたが、すべての組で第1日目とは異なった相手と組み合わせた。さらに、これらの新しい組合せのうち、半分では、第1日目におけるチョコレート・自動車と積木との関係が組内で一致する群とした。すなわち、一人にとって自動車の代理物であった積木が相手にとっても自動車の代理物であるように組み合わせた。これを一致群と名づけた。そして、他半分の組合せでは、上述の関係が逆転するように、すなわち、一人にとってチョコレートの代理物であった積木が、相手にとっては自動車の代理物であるようにした。これを不一致群と名づけた。第1日目と第2日目の間隔は3～7日間であった。

指標

おてつき：代理物選択時において、選択すべき積木を迷い、他の積木をとろうとした行為、すなわち非決定的な選択行為（最終的にはそれを選択しなかった場合に場合に限る）をおてつきとした。

非調整遂行者数：相手の選択と一致させずに代理物を選択し、そのまま課題を遂行した者を非調整遂行者とした。

代理物選択時間：被験者が代理物が入った箱を呈示さ

れてから、選択すべき積木を取りだし、実験装置の車庫に置くまでに、要した選択時間を計った。

他者の選択への注視：被験者が代理物が入った箱を呈示されてから選択すべき積木を取りだし、実験装置の車庫に置くまでに、相手の選択行為をあくに注視した数を計った。

言語反応：実験場面のVTRから被験児の発した言語を記録した。言語は対人言語、自己中心的言語、その他（擬音、実験者への話かけ etc.）の3つに分類した。

結果

おてつき

このおてつきを示した被験児の数は表2のとおりである。この表から明らかのように、一致群では年少児を除いて第1日目、第2日目ともにおてつき反応はほとんど現れていない。年少児の場合、第1日目でおてつきが多かったのは課題への即応の困難さを示すものと考えられる。ただし、第2日目になると年少児一致群でも、他の年齢と同様に、おてつきは減少し、課題への習熟を示しているといえる。

これに対して不一致群では、どの年齢でも第2日目にはおてつきが現れている。これは組内で、代理物が不

表3 非調整遂行者の人数

		第 1 日 目				第 2 日 目			
		1	2	3	計	1	2	3	計
一致群	年少児	0	0	0	0	0	0	0	0/10人
	年中児	0	0	0	0	0	0	0	0/8
	年長児	0	0	0	0	0	0	0	0/8
不一致群	年少児	0	0	0	0	4	2	2	6/12
	年中児	0	0	0	0	4	2	2	4/12
	年長児	0	0	0	0	2	0	0	2/10

表4 代理物選択時間の平均

		第 1 日 日				第 2 日 日				総 平均
		1	2	3	平均	1	2	3	平均	
一 致 群	年 小 児	4.5	4.7	3.9	4.4	3.0	2.3	1.8	2.4	3.4
	年 中 児	4.4	2.1	1.1	2.5	1.4	1.1	1.1	1.2	1.9
	年 長 児	3.1	1.3	1.3	1.9	1.6	1.9	1.3	1.6	1.8
不 一 致 群	年 小 児	6.5	2.6	1.8	3.6	5.6	3.2	3.5	4.1	3.9
	年 中 児	2.4	1.7	1.4	1.8	10.5	5.6	3.8	6.6	4.2
	年 長 児	2.5	1.3	1.5	1.8	7.9	3.7	1.6	4.4	3.1

(単位は秒)

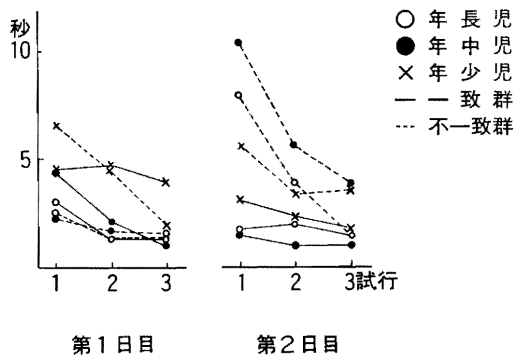


図2 代理物選択時間の平均

年少児では組内で代理物選択の不一致があっても、それを調整せずに課題を遂行する傾向があり、年中児でもほぼ同様の傾向が見られる。それに対して年長児ではおてつきをしながらも相互の不一致を調整し、最後には共通の代理物のもとで課題を遂行していることがわかる。

代理物選択時間

結果を表4、図2に示す。年齢×条件×第1日目・第2日目×試行の4要因の分散分析を行なった。その結果、不一致群は一致群より、代理物の選択に有意に長い時間がかかった ($F(1, 52)=7.91, P<.01$)。また第1日目では一致群と不一致群は、ほぼ同じ時間を要しているが、第2日目では一致群の選択時間が減少するのに比

致になるよう設定された条件によるものであり、お互いの選択が異なることに迷い、それを調整しようとする努力の現われと考えられる。

非調整遂行者

表3からわかるように一致群では、非調整遂行者は見られていない。第1日目の記憶が保持されていることを示すと言えよう。おてつきを行なったとしても、最終的には、象徴を一致させて課題を遂行していることがわかる。これに対し、不一致群では、どの年齢においても非調整遂行者が存在し、年齢による相違が見られる。すなわち、

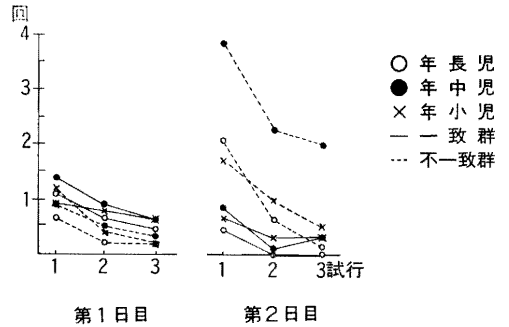


図3 注視数の平均

表5 注 視 数 の 平 均

		第 1 日 日				第 2 日 日				総 平均
		1	2	3	平均	1	2	3	平均	
一 致 群	年 小 児	1.0	.8	.6	0.8	.7	.3	.3	.4	.6
	年 中 児	1.3	.9	.6	0.9	.9	.1	.3	0.4	.7
	年 長 児	1.1	.6	.4	.7	.4	.0	.0	0.1	.4
不 一 致 群	年 小 児	1.2	.4	.2	.6	1.7	1.0	.5	1.1	.8
	年 中 児	.9	.5	.3	.6	3.8	2.3	2.1	2.7	1.6
	年 長 児	.6	.2	.2	.3	2.1	.6	.2	1.0	.6

表6 代理物選択時の対人言語数の平均

		第 1 日 目				第 2 日 目				総 平 均
		1	2	3	平均	1	2	3	平均	
一 致 群	年 小 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	年 中 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	年 長 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不 一 致 群	年 小 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	年 中 児	0	0	0	0	1.42	.17	.17	.58	.58
	年 長 児	0	0	0	0	.67	.33	0	.40	.40

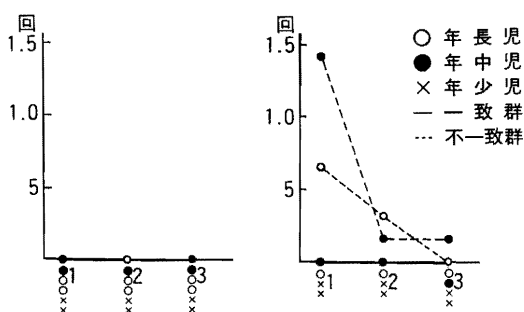


図4 代理物選択時の対人言語数の平均

べ、不一致群では激増している ($F[1,52]=18.52, P<.01$)。試行は第1試行が第2、第3試行より長くかかった ($F[2, 104]=16.18, P<.01$)。この傾向は不一致群の第2日目に顕著であり、試行を重ねるごとに、不一致の調整がすみやかになることを示している。

さらに年少児が第1日目・第2日目ともに時間がかかることは、年少児の課題への即応の困難さを示すものと考えられる。また年中児不一致群は、第2日目の第1試行で増大した選択時間が第1日目のレベルまで戻っていない。これは相互の調整の現れと見ることができる。なお、実験第件の不備により、年中児不一致群の1組2名

はデータより除外してある。

他者の選択への注視

結果を表5、図3に示す。同じく4要因の分散分析をした結果、不一致群は一致群より ($F[1, 54]=22.37, P<.01$)、また年中児は他の年齢より ($F[1, 54]=16.81, P<.01$)、第1試行は第2、3試行より ($F[1,54]=32.55, P<.01$)、それぞれ注視数が有意に多いことが示された。

言語反応
対人言語

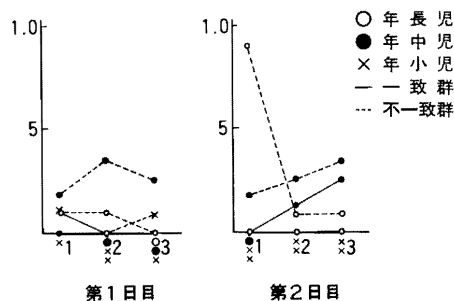


図5 往復路の対人言語数の平均

表7 往復路の対人言語数の平均

		第 1 日 目				第 2 日 目				総 平 均
		1	2	3	平均	1	2	3	平均	
一 致 群	年 小 児	.10	0	0	.03	0	0	0	0	.02
	年 中 児	0	0	0	0	0	.13	.25	.13	.06
	年 長 児	.10	0	0	.04	0	0	0	0	.02
不 一 致 群	年 小 児	0	0	.08	.3	0	0	0	0	.01
	年 中 児	.17	.33	.25	.25	.17	.25	.33	.25	.25
	年 長 児	.10	.10	0	.07	.90	.10	.10	.37	.22

第8 代理物選択時の自己中心的言語数の平均

		第 1 日 目				第 2 日 目				総 平均
		1	2	3	平均	1	2	3	平均	
一 致 群	年 小 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	年 中 児	.25	.13	.25	.21	.13	0	0	.04	.13
	年 長 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不 一 致 群	年 小 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	年 中 児	.42	.42	.42	.42	.08	.25	.08	.14	.28
	年 長 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表9 往復路の自己中心的言語数の平均

		第 1 日 目				第 2 日 目				総 平均
		1	2	3	平均	1	2	3	平均	
一 致 群	年 小 児	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	年 中 児	1.00	.75	.38	.71	0	.25	.13	.13	.42
	年 長 児	.13	0	0	.04	.13	0	0	.04	.04
不 一 致 群	年 小 児	.33	.42	.25	.33	.08	.17	.08	.11	.22
	年 中 児	.75	1.47	1.25	1.14	.75	1.08	.50	.78	.96
	年 長 児	.10	.30	.10	.17	.10	0	0	.03	.10

代理物選択時の対人言語の結果を表6、図4に示す。第1日目では、一致群・不一致群ともに対人言語は使われていない。そして、第2日目になると、年中児、年長児の不一致群にのみ対人言語が現れている。年中児では、第1試行に最も多く、ここで相互の不一致を調整する努力をしているといえよう。年長児において、試行ごとに減少し、第3試行で0になるのは、相互の不一致を調整し、共通の代理物のもとで課題を遂行しているからと考えられる。また年少児では、対人言語をまったく用いておらず、相手の選択に関心を示していないといえよう。

往復路における対人言語の結果を表7、図5に示す。年少児では、積木選択時と同様の結果であり、往復路においても相手への関心を示していない。年中児では、第1日目において不一致群にのみ対人言語があらわれているために、第2日目の両軍の結果を比較することはできない。しかし、年長児・年少児に比べて、言語的相互作用が活発であり、往復路においても、他児の代理物選択に対する関心が大きく、相互の不一致を調整しようとしているといえよう。年長児では、不一致群の第2日目の第1試行が大きく、ここで相互の不一致を調整していると考えられる。

自己中心的言語

代理物選択時における自己中心的言語の結果を表8に示す。また、往復路における自己中心的言語の結果を表9に示す。代理物選択時に典型的に現れているように、自己中心的言語は年中児に多い。このことは、年中児が相互の不一致を調整しようと努力していることと関係があるのではないかと考えられる。

討論

幼児の象徴使用が集団的に共通化されていく過程を検討した結果、その過程における発達的な特徴が明らかになった。

年少児では、おてつき反応が多いことや選択時間が長いことなどに示されるように課題への即応の困難さをみせている。さらに、他者の選択に対してもあまり関心を示さず、選択が相互に不一致な場合でも、言語レベルで相手に働きかけることもなく、最後まで不一致を調整しようとせず、そのまま課題を遂行しようとする傾向が強い。

年中児では、注視数が年長児、年少児と比較して多いことに示されるように、他者の選択に対する関心する関心が強い。そして、選択が相互に不一致な場合には、言語的に相手に働きかけ、相互の不一致を調整しよう努力

する。このことは、また、試行ごとに注視数・選択時間が減少していくことにもあらわれている。しかし、最後まで、相互に不一致な選択を行なっている場合もあり、相互の調整が完全にはおこなわれていない。

年長児では、第1試行目で、言語レベルで他者に働きかけることを通して、相互の不一致を調整し最終的に共通の代理物を使用することができるようになる。

これらのことに示されるように、年少児のように個人的なレベルにとどまった象徴機能から、年長児のように相互の不一致があっても、それを集団的に調整していくことができる集団的象徴へと、象徴の内容が発達していくと考えられる。そして、その発達過程と集団的相互作用の質の向上とは密接に関連しており、対人言語などの発達が有効な役割を果たしていると思われる。今回の研究は実験手続きを精密化し、量的な面で前研究(村野井, 1987)を確認できたと言える。

従来の研究の多くは、象徴の発達を個人内で検討してきたが、本研究で得られた結果は、象徴の形成、および発達を社会的相互作用と関連させて検討することの有効性および妥当性を示すものと言えるであろう。

しかし、この実験では被験児に両者のみたてを一致させるように要求してはいない。それにもかかわらず被験児達はみたてを調節し、一致させようとした。大人であれば、代理物の不一致について、まったく頓着せずに実行するか、あるいは逆に、相手との論争や実験者への質問へと発展するであろう。つまりこの実験は、子どもにとって虚構上の行為をいっしょにやれる方が、象徴へのこだわりよりも重要なことを示しているのである。辻野(1978)は、事物の意味づけがシチュエーションによって規定されることを示している。すなわち、問題は「これはウソッコで行う」ことであり、別の課題、例えばハミガキや着替えは「現実に行なう」べきことであることが、なぜ、どのようにして子どもに理解できるようになるのか解明することであろう。

文献

- E'likonin, D. B. 1966 Symbolics and its function in the play of children. *Soviet Education*, 8, 35—41
- E'likonin, D. B. 1964 (駒林邦男訳『ソビエト児童心理学』明治図書)
- Golomb, C. 1977 Symbolic play: the role of substitutions in pretence and puzzle game. *Br. J. educ. Psychol.* 47, 175—186
- 石橋由美・中峰朝子 1979 幼児の遊びにおよぼす情報の効果 教育心理学研究 27巻4号 287—290
- Jackowitz, E. R. & Watson, M. W. 1980 Development of object transformation in early pretend play. *Devel. psychol.*, 16, 6, 543—549
- Jackson, J. P. 1974 The relationship between the development of gestural imagery. *Child Development*, 45, 432—438
- 加用文男 1981 幼児のケンカの心理学的分析 現代と保育 9号 176—189 ささら書房
- Котетишвили, И. В. 1966 К природе репрезентации в процесс символической игры у дошкольников (от 4 до 7 лет). Под ред. А. В. Запорожца и А. П. Усовой *Психология и Педагогика игры дошкольника*. Изд. Просвещение, Москва.
- 久保田浩 1973 『あそびの誕生』誠文堂書店
- Muranoi, H. 1987 A pilot study of children in pairs' adjustment process with symbols 弘前学院大学一般教育学会誌 第7号 45—49
- 村野井均 1987 幼児における象徴の共通化の発達の研究 弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要 第23号 75—86
- 中峰朝子 1979 幼児の象徴遊びに及ぼす玩具特性の効果 教育心理学研究 27巻1号 62—66
- Непомнящая, Н. И. 1975 Исследование процесса замещения предметных действий у дошкольников. Под ред. Н. И. Непомнящей, Педагогика. *Опыт системного исследования психики ребенка*.
- Overton, W. F. & Jackson, J. P. 1973 The representation of imaged objects in action sequences: a developmental study. *Child Development*, 44, 309—314
- Piaget, J. 1962 *Play, dreams and imitation in childhood*. Inc. W. W. Norton & Company, New York, (大伴茂訳 1967・1968 『模倣の心理学』、『遊びの心理学』、『表象の心理学』黎明書房)
- 隅田征子 1985 幼児のイマジネーション 永野重史・依田明編 発達心理学への招待2 『子どもの世界』39—59 新曜社
- 高橋たまき他 1972 遊びの発達心理学に関する基礎的研究 日本女子大学児童研究所紀要 Vol. 1, 25—42
- 高橋たまき他 1974 遊びの発達心理学に関する基礎的研究 第2報 日本女子大学児童研究所紀要 Vol. 2
- 高橋・広江・守屋・次丸 1976 集団自由遊び場面における幼児の行動分析 一対人行動について— 日本女子大学児童研究所紀要 Vol. 3
- 高橋たまき 1984 『乳幼児の遊び』新曜社
- 辻野直子 1978 就学前児の「みたて」の発達—特に遊びとの関連で— 教育心理学研究, 26, 114—123
- 内田伸子 1986 『ごっこからファンタジーへ』新曜社

Vygotsky, L. S. 1971 (藤本文郎・柴田義松訳 子どもの精神発達における遊びとその役割 『季刊 国民教育』 9月号)

Werner, H. & Kaplan, B. 1963 *Symbol formation Inc.* John Wiley & sons. (柿崎祐一盤訳 『シンボルの形成』 ミネルヴァ書房)